

第2回報告書

2016年12月9日

船井情報科学振興財団

2016年度奨学生 小栗直己

[E-mail: oguri@umich.edu, Website: labusers.net/~oguri/]

PhD student

Macromolecular Science and Engineering

College of Engineering

UNIVERSITY OF MICHIGAN

はじめに

2016年9月から、University of Michigan、Macromolecular Science and Engineering(高分子学科)のPh.D program に在籍している小栗と申します。今回は、船井情報科学振興財団の第2回報告書として、私が所属する学科の紹介や、留学中の体験・所感を記します。

Macro 学科について

私が所属する Macromolecular Science and Engineering は1学年10人程度のコンパクトな学科であることから、学生間や教授・各スタッフとのコミュニケーションが取りやすい環境です。Macro 学科には教授が40名ほど在籍しています。機械系、電気電子系、生物系、化学系、材料系、医学系などの学科に籍を置く高分子を

用いて研究を行っている教授が集まっており、非常に学際的な学科です。学生は幅広い知識を身に着けることが求められており、卒業要件に必要な単位の半分を他学科から取得してくる必要があります。

学生間の関係は良好で、週に一度の勉強会があったり、頻繁にパーティーが開かれたりします。学科の事務や学科長もフレンドリーに接してくれるので、リラックスして学生生活を送ることができます。

私が陥った失意

ネガティブな内容になって申し訳ないですが、留学中に体験したことを話せる範囲でお話したいと思います。後続のみなさまの参考になれば幸いです。

私は早い時期に合格を頂けたこと

もあり、5月には渡米して希望研究室での研究を始めました。この頃の私はやる気に満ちていましたが、次第に研究室での生活に不満を抱くようになりました。主に、研究室の環境や教授の指導スタイル、教授との人間関係などが不満の要因でした（具体的にどのような事があったのかについては、ここで申し上げることは適切ではないと思いますので控えさせていただきます）。この戸惑いが、日本とアメリカの文化の違いによるものなのか、私の考えや能力が不足しているのか、それとも教授や研究室のスタイルが私に合っていないのか、その答えを探し求めるのに長い時間を要しました。他の教授や学科のスタッフなど、その他多くの方に相談に乗っていただき、他の研究室を見学して私が得られるだけの客観的な視点を得たうえで、その研究室を辞めるという決断をしました（客観的だと自分が思った時点でそれは主観的だ、というツッコミはごもつともです）。

この体験は私にとって衝撃であったため、価値観やキャリアプランが大きく変わったりもしました。今回の件で改めて気づいたのは、人の考えや価値観、目標などは時間の変遷とともに変わりゆくものであるということ、また、自分自身で手に入れたと思っている思考・能力・環境は他人からの影響

やサポートを受けた上で獲得できているものだということです。当たり前のことですし、こそばゆい内容ではありますが、非常に重要な考えであると改めて認識しました。相談に乗っていただいた方々、迷惑をおかけした方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

後続の方へのアドバイス

今回の経験をもとにして、海外大学院に留学しようと考えている方へのアドバイスを僭越ながら以下に記させていただきます。私個人の意見が多分に入っているので、鵜呑みにしすぎないようにお願い致します。

1. 可能であるなら、出願前に希望研究室を実際に訪れて、教授や研究室の雰囲気や自分が合っているかどうか確認しましょう。
2. 研究室に所属する学生やOB・OGにコンタクトを取り、所属する者にしか知りえない情報を手に入れようと試みましょう。
3. 一緒に研究したい教授が多くいる大学・学科に入学した方が良いと思います。
4. 研究室を決めるのは入学した後でも遅くないですし、各研究室に関する情報を十分に得られる状況になってから研究室を決めても良いと思います。もちろん、ケースバイ

- ケースです。
5. ラボローテーション制度があるなら、それを存分に利用して自分にマッチした研究室を探し求めるのも良い選択だと思います。
 6. 研究室内で不遇な状況に陥った場合、友人や学科のスタッフ、カウンセラーに相談してみましょう。カウンセリング室やハラスメント対策室は十分に機能しているように思えます。
 7. 他人からの(ネガティブな)意見をシャットダウンすることも時には大切です。
 8. 耐えがたい状況に陥ってしまった場合、研究室や大学を辞めることも選択肢の一つです。
 9. 不遇な状況に陥ってしまった原因が自分/相手「だけ」にあるケースはほとんどないということ。
 10. 辛い時期は必ず訪れるということ、そして、それは永遠には続かないであろうということ。

さいごに

かなりネガティブな内容になってしまいましたが、現在の私は至って健康ですし、QOL も高いです。これからまた心機一転、楽しく頑張ろうと思います。肩ひじ張らず、毎日楽しむことも大切だと思います。

留学に関するネガティブな情報は

なかなか表には出ませんが、留学生はみな少なからず辛い思いをしていると思います。ネット上にはポジティブな留学体験記が多いので、たまにはネガティブな留学体験記もあっていいかなと思いますし、その方が面白いです(?)。私の体験談がみなさんの役に立てば幸いです。